
難波崇司の数学的魔術

春功

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

難波宗司の数学的魔術

【Nコード】

N9762E

【作者名】

春功

【あらすじ】

この物語では殺人は起こらない。起こるのはこの世にある不可思議な出来事だけ。それを世間では「魔術」「奇跡」と呼ぶ。しかし必ずそれらには「種」がある。全てを解き明かすには自分で証明するしかない。社会科教師、難波宗司の推理が今始まる。E p 1では女子高生、木頼珪沙が 誕生日の魔術師 という幼稚園風女子高校生とであう。彼女は 魔術 が使えると、珪沙たちに勝負を挑んできた。読者参加型の推理小説が始まる、だれが一体解き明かすのか。現在問題編を執筆中

誕生日の魔術 e p 1 (前書き)

魔術、それは種があるものを、そう呼ぶ。

誕生日の魔術

出題

「珪沙君。こんな問題を知っているかい？　ここに種類が違う果物が五つ。種類が違う野菜が三つある。計八つの食べ物があるね。それを君は一つずつ食べていくんだけど、いったいその食べ方には何種類のパターンがあるのかな？」

そう彼、難波崇司は聞いた。

もう社会科準備室のカーテンの外からは、オレンジ色の光が差し込んできた頃だったと思う。目を開けると、いつの間にか時間は経っていて、下校の音楽がスピーカーから流れていた。

その声に気づいて、私は机に伏していた体を起こし、その声の主を見る。

彼は、カーテンのそばにある、古びた大きな机、なぜかそれにそぐわない上等な椅子に座り、優雅に安いお茶を飲んでいた。艶やかな短い黒髪に、ピシっとした紺色のスーツ姿。それと彼から淡いラベンダーの香りがした。彼は、自分の髪をかきあげ、お茶をすすっている。そのところどころには枝毛があり、可愛いと思うが、実際彼はそんなことはどうでもいいと言うだろう。

「なんて言いましたか？」

眠ってしまったので、さっき彼が言った言葉がよく聞こえなかった。

机の上にはたぶん長時間寝ていたであろう、私の唾液の海が広

がっていた。それに気づいた私は急いで、近くにあったティッシュでふく。

「君の知恵の泉は、部活中に寝ている時に湧き出てくるのかい」

「先生・・・何て言いました？ 私、が涎を出すのがそんなに珍しいですか？」

その皮肉に拭く手をとめて、あのスカした野郎をにらむ。

難波宗司はカーテンを見つめたままだ。

「ふむ、おもしろいね。木頼君。君の思考回路を解明してみたいよ」

また、ずっととお茶をすすった。

何がおもしろいのか全く分からないが、気持ち悪さはない。

難波宗司はいかれた理科系のオタクではない。むしろ、それとは逆の存在。この高校で社会科を教えている教師なのだ。生徒の関心を引こうと、授業中よく笑わせようとするが、誰も笑わないのは有名だ。曰く、彼のギャグを聞いたら南極にいた方がいいというほどである。しかもその授業の初めには必ず授業中で理科系の小ネタを入れてくるのだ。社会科の科目にも関わらず、それをやりテストにその小ネタを出すことでも有名だった。生徒からは点を取れる問題のため、授業中よりもこの小ネタを真剣に聞くといい、可笑しい状況になっていた。

こちらも見もせずに、オレンジ色に染まったカーテンを見ている。カーテンは閉まっているので外の夕暮れは見えるわけもない。

「綺麗だね、まるで絵画みたいだ」

このキザ野郎。夕暮れがカーテンに透過して、絵画みたく見える

というのか。

あえて、私はそれに答えず、自分の涎を拭いた。

「先生、今日はいらっしやらないと思っただけですけど」

「ふむ、私に何か重要な用事があるのでは？ 授業が終わったあと、私に声をかけようとしていたではないか？」

確かに私は今日の日本史の授業が終わった後に、彼に聞きたいことがあつて、声をかけようとした。しかし、それは単に他愛もないことを聞こうと思っただけかもしれない。

「なぜ、私が重要な用事があると分かつたんですか？ もしかしたら今後の部活のことを聞こうと思っただけかもしれないじゃないですか」

部活。通称、社分会。正式名称は社会構造比較制度分析同好会という自分でもよく覚えられない部活名。主な活動は社会構造の比較や社会問題の研究、ボランティア等となっているが、実態は部員1人の完全同好会扱いとなっている。その由来は、昔にある成績の悪い学生が内申点を上げようと小難しい同好会を設立したのが始まりだという。

そして、その部活の顧問が、社会科教師、難波崇司ということになっている。

難波崇司はカップを古机の上におき、手の甲を口に近づけて笑った。

「なにが可笑しいんです？」

クソ野郎、と内緒で心の中に付け加える。

「いやなに、君は重要なこと、特にあのこと（・・・）についてになると、目が水晶の如く煌くじゃないか。知らなかったのかね？」

目が水晶の如く煌く。何というキザな台詞。お笑い芸人も恥ずかしくて逃げてしまいそうな台詞だ。

涎を拭いたティッシュを彼に投げつけるのを我慢しながら、彼の言った重要な核心は確かにあっている。涎の件もあるのに、さらに顔が赤くなっているのが自分でも分かった。

「……先生、聞いてくれますか？」

くるり、とイスを回転させ、難波崇司がこちらを向く。

「さて、魔術なんだろう？ 君の重要な話というのは。一体、どんな魔術を見たのかね、木頼君」

難波崇司の目が鋭く変わったのが、ここにも分かった。睨まれているわけでもないのに、見つめられると体が動かなくなるような竦んだ状態になってしまう。いつものことだが、この目は慣れない。

「あ、あの。私、昨日帰り道に友達と一緒にお茶をしようってことになったんですけど、その時たまたま入った喫茶店で私の友達、志岐和美の友達と出会ったんです」

「ふむ、木頼君。学校の校則を知っているかね？ 第十一章の四十四条だ。「帰宅途中の寄り道禁止」についてだ。あれによると……」

黙れ、急須に入っているお茶を投げつけたくなる。

「先生、茶化さないください。そのことについて話していたら、日が暮れてしまいます。今はそれよりももっと重要なことを話したいんです。校則については、後でどうとでもしてください」

じつと、難波宗司を睨む。彼は微動だにせず、見つめ返している。相変わらず鋭い眼光は変わらない。

「続けていいですか」

「ふむ、続けたまえ」

ふー、と短い溜息を吐いた。やっと落ち着いて話ができる。

「要点を言いますけど、しっかり聞いてください。私も疑問なんです。なんであんなことが出来るのか、どう考えても分かりませんでした。和美の友達が行ったあの魔術には必ず何かあります」

「……………」

「その人は自分のことを メイガス 魔術師 と語ったんです。 バースデー 誕生日の魔 メ 術師 イカス と……………」

そうして、私は和美と一緒に見た、その不思議な出来事を語った。

誕生日の魔術 e p 1 - 2 (前書き)

少しずつですが、更新していきます。どんなことでもいいので、感想やコメントなど、お待ちしています。

あれは昨日のことだった。六時間の退屈な授業が終わった後、その鬱憤を晴らすため、友達を誘ってどこかでお茶をして行こうかと思っていた。そのときだったと思う。

「けーい、ヒマ？ どっか寄っていかない？」

声をかけてくれたのは私の友達、志岐和美だった。前の学年から同じクラスで今も仲良くしている。制服のスカートは一切短くなつてない。大きく開かれた瞳が印象的で、髪はざつくばらんにショートでそろえられている。顔を見ると、一切の化粧が見られない。第一印象は、地味で目立たない物静かな女の子と、見えるかもしれない。でもこの子、肌ピッチピッチなんだよね。文句が言いたいくらいなんだけど。

「他の皆は、用事があってこれないってさ、付き合い悪いよなあ」

和美の癖は男口調だ。和美は、実はかなり頭がよく、特に私が嫌いな理系科目が得意らしい。こういう子の特徴としては、勉強が出来て無駄に地味なら、物静かと相場が決まっていそのだが、和美は違う。口が悪い、と言う点で違う。なぜかその男口調と地味のギャップが妙に同学年の異性からうけている。

「丁度良かった。私も誰か誘って、遊びに行きたいなって思ってたんだ」

「あ、でも。ケイ、部活は？ 社分会があるんじゃないの」

「今日先生がいらないから、部活はないの。なんだか次の授業のために、教材研究しなければならぬとか、言ってた」

「数字の？ 珍しいね」

数字とは、難波崇司の渾名だ。社会の授業中に必ず理数系の小ネタを挟むことから、「崇司」すうじ「数字」となっているらしい。よくもまあ考えたものだと思う。

「ギャグでも考えてるんじゃないの？ 極寒ギャグ。今日だって聞いた？ 授業中にさ、ついていけない子に対しての一言。『みんなと一緒に協力してやれば、必ず伸びる。だってそれは強力だから』だってさ。最初みんな、ギャグいつているのかわからなかったから、あいつもう一度言ったじゃん『協力することは強力だ』って。誰も笑わなかったし、逆に場が凍りついたよね。あの極寒ギャグで」

にこり、と切れ味がある笑顔をして、嬉しそうに和美が笑った。

極寒ギャグ、という的を射た言葉に、私も賛同した。

「そうそう、だからクラスの人が『ここは北極か』なんてツッコミを入れて、みんな苦笑してたよね。クラスのフォローがないと、言われた人が逆にかわいそう」

「あれは私も、嫌だわ」

片手を振って渋い嫌な顔をした。

「でも、先生はあれで面白いと思っているみたい。ここだけの話だけど、自分で笑わせているかと思っっているみたい。自分の力だって、

過信してるみたい。しかも、一生懸命ノートに笑わせるネタを書いているのよ?」

「本当?! それは笑える! それ、ケイは見たの?」

「ううん、見たことは無いけど、部活中に一心不乱に何か書いているのは、見たことがあるよ」

「絶対、そんな数字の姿、思いつかない」

「あ、でも先生の考えている一生懸命な姿、結構、かっこい……」

『木頼君、そのところは語る必要があるのかい?』

え。だめですか? もっと、核心部分から話してほしい、といわれても。だから、君は論理的な考え方が出来ない? それはひどいです。分かりやすく説明しようとしていただけです。

はいはい。分かりました。そんなにいうなら、飛ばしますよ。せっかくの読者サービスなのに。もしかして、怒ってます? だって眉毛がつりあがってますよ。残念です。もう少し、詳しく話したかったのに。

『ところで、読者サービスとは何のことだい?』

……

答えるのが面倒臭いので、後で答えますね。話の路線を元に戻します、いいですか。

私たちは学校を出て、帰り道、商店街方面へ行きました。国府里

商店街です。知っているとは思いますが、駅に行くにはどうしても商店街を通らなくてはいけません……。

……
夕方のせいもあって、商店街の人通りは多かった。買い物袋を携える主婦と子どもや、学校帰りの生徒も何人か見受けられた。この時間帯は駅と学校の道の途中にあるこの商店街はどうしても混む。

「ケイ、どこいく?」

この国府里商店街には、駅から近いこともあって、さまざまな種類の店がある。八百屋、肉屋、魚屋といったものだけでなく、飲食店、学生用のカフェや、洋服屋なども出ている。買いたいもの、欲しいものはここでほとんどそろってしまいうぐらいだ。

「夢の国 は? あそこなら、お茶にもちょうどいいし、ゆっくり出来るから」

「そうしようか。あ、でも今の時間混んでいないかな? まあ、いっか」

夢の国 は喫茶店である。商店街の通りから奥に入った場所にある隠れ家的カフェである。造りが中世的で古風な店で、大通りから少し奥に入ったところにあり、客席も少ないため、静かな場所としてよく学校帰りに活用する学生も多い。珈琲が有名だけでなく、軽食類も美味しいと評判だ。

「そうだね。でもいいじゃない。私は 夢の国 がいい」

「こつちだっけか、道合ってるよね？」

大通りを避けて、商店街の脇にある小道に入っていく。大通りより雰囲気は暗めで、近寄りがたい印象を持った。小道に入るだけで民家が両脇に並ぶ。ただ、小道が狭いためか、隣の家との距離が極端に近い。

「もう少し道が分かりやすくして、広ければ良いのにね」

「確かに。これじゃあ、獣道を通っている感覚みたい」

和美が、自分の言葉に苦笑した。獣道とまではいかないまでも、確かに少し冒険しているような感じがする。子どもどころ、路地の道を縦横無尽に駆け巡った小さな冒険の感覚に似ているのかもしれない。

五分ほど歩いて、古風なレンガ造りの店が見えてきた。一階建てで、テラスが見える。一見民家に見えそうな家だが、周りに垣根は無く、すぐここからでも店内が見え、テラス席の日よけ用の白いパラソルが見えた。古風な木製のドアを開けると、来店が分かるように鈴が涼しそうに鳴った。店内から静かな曲が流れているのが分かった。

「いらっしやいませ、お二人様ですか？」

「うわ、可愛い…」

頷く前に、和美が思わずそういった。たぶん店内が、ではなく、応じた女の子に対してだと思う。店員が着ているのは、店の制服、メイド服に少し似ていたが、現代風アレンジがついた服だった。こ

れ以上、度を超すと何かのコスチュームにも見えてしまうが、色使いが落ち着いているせいか、そうは見えない。制服自体も良いが、着ている女の子にとっても似合っている。頭には力チューシャがついていて、大きな瞳におっとりとした雰囲気があった。これなら、確実にもてるだろう。なんだか同じ女の子として釈然としない。

「ケイ、どうしたの。眉間にしわが寄ってる」

「……………」

しわは女の子の敵です。頬を思い切り二度叩いて、笑顔に徹しようががんばった。

「叩いたから、顔が真っ赤になってる」

「……………いいの!」

痛みではない、恥ずかしさを頬に感じた。

「こちらへどうぞ」

店内は意外と空いていた。カウンター席に二人、テーブル席は六つあるうちの二つが埋まっているだけだった。ちらりとみると、後姿しか見えないが、隣のテーブル席に小さな女の子がぱくぱくと美味しそうにパフェを食べている。

少しその絵面がおかしくて、笑ってしまった。小さな子どももいるんだ、と驚いた。そのことを和美に話すと、興味がわいたのか、盗み見ようとして、身体を傾け始めた。

「ちょっと、ばれたらどうするの?」

止めようとしたが、持ち前の好奇心にどうにもならないらしく、大丈夫、大丈夫といいながら、ぜんぜん大丈夫ではない変な行動を取ろうとしている。思い切り飛び跳ねて、その子を見ようとしたのだ。

「か、和美！」

「か、和美、やめてよ」

「うわちゃー！」

注意したら、和美が突然奇声を上げて、隠れるようにテーブルの下に身体を隠そうとしたが、隠しきれていない。みつかちゃった、と言っているみたいだった。

「見つかつちゃった？ ……え」

後ろを振り向けない。これは正直やばい。

「こっち見てる…てちょっと珪沙！ なんでもそこで携帯打つまねしてるの、そもそも携帯手元に無いじゃない？！」

「た、他人のふり？ みたいなの」

同じテーブルで他人のふりも無いと思ったが、友人が起こしたこの状況に対して、ど牛たらいいか分からなくなって苦し紛れの結果だった。

「あああああああ、こっち来たあ！ どうする、どうするの、どうしたらいいの？」

和美があせりでいつもの口調から、女の子口調に戻っている。そういえば、緊張や混乱すると、和美は普通の女の子になる。そもそも

も本当は外見が地味な女の子に見えるのだから、こっちのほうで普通に見える。

「あああ、来たよ、どうしよう珪沙あ。立ち上がって、どこ行くのさ？」

「ちょっと、トイレ」

「こついうときは席をはずすのに限る。と思って立ち上がるうとしたら、がっしりと、和美に制服の袖を両手で握られた。引っ張って強引にはずそうとしたが、何か不思議な力がかかっているのか、話さなかった。」

「ちょっと、しわが出来るから」

「友達でしょ、お願いだから、一緒にいて。それに顔のしわが出来るよりはいいでしょ？」

なんて言った、この女。思いつきり頬を撫でてあげたい。

「ああ、もう。離してって……あ、」

その小学生みたいな女の子が、すでにこのテーブルの前にもういた。和美のほうをじっと見ている。身長は思った以上に低い。150センチあるかどうかだ。黒髪のショートボブ、目は大きめで、その瞳にはまだ幼さが残っている。小さな唇が印象的で子どもにしては端正な顔つきをしていた。

「あ、その、こ、こんにちは」

しまった。このタイミングで挨拶してしまった。これからどうしよう。誤ったほうがいいのかもしれない。こっちのほうが　ほとんど和美のせいだが、悪いんだし。

「ごめんなさい、私たちは邪魔しようと思っていたわけじゃないの。ただ、なんていうか……」

「カズミ？　和美でしょ？　そうだよっぱり。久しぶり！　私、ウキだよ！」

「へ？」

テーブルの下に隠れていた和美が、おそろおそろ、視線を向ける。表情はとても硬い。最初は怖がってみていたが、相手に敵意が無いと見て、しっかりと相手を見つめた。そして、心当たりがあったのか、和美がゆっくりと口を開いた。

「ウキ？　園比雨稀？」

「そだよ、中学以来だね！」

ウキという名前の女の子が和美に向かってダイヴするように抱きついて和美を押し倒した。何か倒したとき、途轍もないような音がしたようなぶつかった音がしたが、とりあえずここは無視しても良いだろう。

「ちょっと、雨稀、重いし……痛い！」

和美はそのまま床に倒されて、少女の下敷きになっている。

「和美…この子と知り合い、なの？」

「あ、うん。ちょっといいからどいてって、雨稀。紹介するよ。この子は園比雨稀。中学校が同じだったの」

いわゆる おな中 というやつなのだろう。

「こっちは、同じクラスの、えつとなんだっけ？ ちょ、そんな怖い顔しないで、ケイ。今は、助けてくれなかったお返し。こっちは私の親友の木頼珪沙」

ここはボケるところじゃないでしょう。その眼鏡を叩き壊すよ。いまさら親友扱いされてもぜんぜん嬉しくない。むしろ、その弾力肌をストッキングみたく伸ばしてだめにしてしまいたい。というか、弛んでしまえ。

「よろしくね」

「よ、よろしく」

なぜか園比雨稀がVサインで応えた。容姿に比べて、性格的にちよつと普通には見えない、おかしな女の子だ。

「和美の友達ということは……え、同い年?!」

和美と中学校時代同じだったとしたら、年が一緒だということだ。思わず口から出てしまっていた。なんとというか世界七不思議というものがあるのなら、この発育の遅さはこれに数えられてしまってもいい気がする。それほど、同い年には見えない外見をしている。

そしてやつと、雨稀が学校の制服を着ているのが分かった。私たちの制服とは違い、白を基調とした制服だ。これは確か国立大学付属新里高校のものだ。この街にあるもう一つの学校だ。有名進学校として知られているらしい。

「そだよ、これでもしっかり十六才!」

「……………」

「みえない、でしょ? そうなんだよ、雨稀は中学時代も、ほんとよく幼稚園児に見間違えられてた」

内心を見透かされてしまった。頭の中で考えていた言葉を和美に言われてしまったのだ。恥ずかしくなって、雨稀から目を逸らした。

「恥ずかしいから、止めてよ。あ、そうだ和美とケイちゃんも、こちで一緒にお茶しようよ」

ケイちゃん？ それって私のことか。いきなりその呼び方はどうかと思うけど、その短いニックネーム付け、何。難波先生とは違うむかつきを感じるんですけど。それでも子どももみたく見えるから、まあいいや、と少しだけ思ってしまう。子どもって、卑怯。

「珪沙、どうしたの。いいでしょ？ 三人で」

「あ、うん」

私たちは、自分たちのテーブルから雨稀がいるテーブルに移動した。そして思わず声を上げそうになった。雨稀のテーブルには、紅茶のほか大きなパフェが三つ置いてあったのだ。しかもそのうち二つはすでに空っぽになっていた。

「雨稀 あんた、これ食べたの？ 相変わらず、甘い物好きな所は変わってないんだね」

「うん、あともう一つ注文中だよ」

今、さらりとすごいことを言わなかった？ ここのパフェは他の店と違い、大きい。比べて1.5倍ぐらいは違う。一つでも、食べきれない人がいるのに、四つ注文して、残り二つも食べるらしい。辟易している和美も、相変わらず、の一言で納得しないで欲しい。

「どうして、その食欲が、発育の役に立たないんだらうね？」

「どこ触ってるの、和美。それは言わないで。それでも私、気にしてるんだから」

和美が問答無用で、雨稀の胸を制服の上からさすっていた。当然

の如く膨らみは無い。その部分では私は勝っている自信がある。嫌がるそぶりを見せずに触られている雨稀は、気にも留めず、パフェを食べている。つわものだ。

「和美も、そのセクハラ癖、治ってないんだね。中学校のときももっと凄いことされちゃったし」

「なっ、私にそんな癖は無い。あ、ちょっと、本気にしないでよ、珪沙。あくまで冗談なんだから」

和美のセクハラ癖は初耳だ。今までそんなことやっている和美を一度も見たことが無い。すこし和美の評価を変えなくてはいけないみたいだ。冗談に見える光景ではないことに早く気づいて欲しい。

「雨稀はね、中学校の頃から、甘いものに目が無かったんだ。本人は糖分補給とか言って、学校にもたくさんのお菓子を持ってきてたの。何度も先生に取り上げられたのに、それでも懲りずにまた持ってきて、危うく大事になりそうなお菓子があつたんだ」

「はあ」

あまりのおかしな話についていけない。呆れてしまっぐらい、変な話だ。

「しょうがないでしょー、私には糖分が必要な。それにパフェは別腹なの」

「あはは。本当に糖尿病になってもしらないから。ここへはよく来るの?」

「うん。ここのパフェは美味しいから。それに、ここの雰囲気が好きだし、今流れている曲も好き」

ちなみに、話題には出ていないが 夢の国 はただの喫茶店ではない。 夢の国 は、体裁は喫茶店として知られているが、実際はジャズ喫茶をつたっている。だからこの店内に流れる曲はすべてジャズ、またはジャズアレンジされている曲ばかりらしい。

「曲ってこの？」

今店内で流れている曲は、軽快なピアノを主体としている楽曲だった。

「うん。これ make someone happy (誰かが幸せになる) って曲。私、好きなんだ、この曲。誰が弾いているのかしらないけど」

「ぜんぜん分からないけど……」

その時だった。

「よく知ってるね。お待たせしました。紅茶とパフェです。今流れているのは、弾き手によつてぜんぜん違う雰囲気になるけど、ジャズピアノスト、bill evansの The Best Of Bill Evans Live から流してる。本家は違うけどね」

横から、飲み物を持ってきたウェイトレスが口を挟んだ。注文していたお茶と、雨稀が頼んだらしいパフェが、ワインレッドのトレイに乗っていた。

入り口で会ったウエイトレスとは、ちょっと印象が違った。服装と姿かたちは瓜二つだが、違和感が少しだけある。八重歯があるのが印象的なウエイトレスだった。乱暴な言葉遣いからも活発そうなオーラが少し現れているように思った。

「どうぞごゆっくり」

一礼して、ウエイトレスが去っていく。その姿をなぜか追っていた。最初出会ったウエイトレスとは違う魅力を持っているせいかもしれないかった。

誕生日の魔術 e p 1 - 5 (後書き)

次回ぐらいで、魔術 が現れます。なぜ、そのようなことが出来るのかを考えてみてください。それが話の焦点になります。

ちなみにジャズは、その登場人物のテーマ曲だと思ってください。
一人ひとりにテーマ曲があります。

「でも結局、意味が分からないよね……ぜんぜんジャズ知らないし」

「あははは、確かにね」

一口紅茶をすする。甘酸っぱさと苦味が渾然となった味だ。この苦味はちよつと苦手だけど。

「そつだ。その制服、雨稀は新里しんり高校行ってるんだろ？ 今なにやっているの」

何気ない質問だったはず。和美と中学で分かれてから、雨稀がどんな生活をしてたのかを聞くという普通の質問だった。だが、ここで初めて雨稀はパフェを食べるのを止めて、とんでもないことを言った。

「私？ 私はね、魔術師だよ。私は 魔術師 で 高校生 なの」

「は？」

背筋がゾクリと冷たくなった。

今度こそ狂ってしまったのだろうか。電波系の属性でも持っていて何か変な電波でも察知してしまったのだろうか。違う。この小さな女の子は確かに今、魔術、と言ったのだ。魔術の名を語ったのだ。

「えつと、今なんて言ったの？」

もう一度問う。

明らかに 魔術 というフレーズは非現実で非日常的だ。現代において、そんなことを言う人ははつきり言って距離を置いて接しなくなるのが人情。思わず、二次元逃避してしまっているのかと考えってしまう。しかし、私はあの社会科教師から、魔術 という現象について少なからず、教えてもらっているし、説明できないような不可思議な現象を見せ付けられたこともある。だからこそ、私はその言葉を少しだけ、和美とは違う立場で、考えることが出来る。

「だから、私は 魔術師 なの。魔法だって使えるんだから！」

難波先生は言っていた。魔術 とは、科学と相反するものではない。先生の長い講釈によると、オカルトや宗教的なものとは一線を画し、科学の双極の位置にあるものではないという。よく分からないが、先生いわく、科学な出来事に似ている、このことらしい。それを総称して 魔術 と呼ぶ。

「何言ってるんの、雨稀。そんな冗談は止めて。そんなふうに話を逸らしてもダメだから。だいたい、魔術師 って、ファンタジーで出てくるあれでしょ？ それに中学校のときはそんなこと言わなかったじゃない」

「違うよ、和美。ほんとに私は 魔術師 で 高校生 なの。高校生になって、魔術師 になれたの。本当に魔法が使えるんだから！」

ぷー、と頬を膨らませた。異質な言動とは比べて、その幼いギャップが変な鳥肌を立たせた。空調の温度が少しだけ、下がったような気がした。

「この子ね、まあ、見て分かると思うんだけど、不思議っ子なんだよね。学校でもそんなこと言って、クラスのみんなからよく怒られてたんだよ。だから、あまり気にしないで。どうせ嘘八百なんだから。って聞いてる？」

無意識のうちに、唾液を嚥下していた。

「あれ、も、もしかして、雨稀の言っていること信じてるの、珪沙？ 黙っちゃってどうしたの？」

黙っていたのは間違いないが、どちらかというと絶句していた。現に身体が無意識のうちに震えてしまっている。それが本当なら、これで二人目だ。私が 魔術 を使える者に出会ったのは。

「ケイちゃんは信じてくれてるの？」

「ほ、本当に使えるの？ 魔術」

まだどちらかというと半信半疑だ。いつもなら、鼻にもかけない、堂でもいい話として流してしまっただろう。もちろん、難波先生との一件が無かったら、だ。

「ぶー、ケイちゃんも信じてくれないんだね。もちろん、出来るよ。だって私は 誕生日の魔術師 (birthday magus) だから」

誕生日の魔術師 (バースデー・メイガス) と園比雨稀は、自分のことをそう称した。

誕生日の？ とは一体どういう意味なのか分からない。だが、雨稀は自信満々で未だ三つ目のパフェを食べている。彼女にとっては本気らしかった。

「分かったよ。ケイちゃん、和美。見せてあげる、私の魔法！」

「?!」

今、ここで見せると断言した。どうやら彼女はここで魔術を使うことが出来るらしい。どんな内容かは分からないけど、喫茶店の中でも出来るものらしい。いきなりファンタジーぽく、攻撃とか結界とか、そういうことを想像してしまいそうだけど、この幼稚園高校生が出来るはずもない。

「出来なかったら、どうする？」

もう店内のBGMは頭に入ってこなかった。周りの雰囲気はもう、無視だ。

「賭けてこと、ケイちゃん？ できなかつたら、じゃなくて、出来たら、でいいよ」

人差し指を振って、もう一方の手でパフェを食べながら、雨稀は笑った。

どうやら、相当の自信があるらしい。もう出来ることを前提にしている。ただの強がりというわけではないらしい。雨稀の眼は真剣

そのものに見えたからだ。

「だから、私が出来たら、ここの特製パフェ二つ、おごって。出来なかつたら、私が和美とケイちゃんの会計を持つから」

「特製パフェ（いちばん高いやつ）？」

特製パフェとはこの店で一番高いメニューだ。千円札二枚で食べられる超高級パフェで、私自身いまだに食べたことが無い。なんでも色々な種類のアイスとトッピングがのっているらしく、その量も二人分ぐらいあるらしい。

「どつ？」

「ちょっと、それって、もしかして私も入ってるの？ 雨稀が出来たら、私と珪沙でおごるってこと？」

もちろんその通りだ。けしかけているのはほとんど私だけど、和美にも責任がある。彼女と、誕生日の魔術師 を名乗る女の子と知り合いだっただから。そんなことがなければこんなことにはならなかつたはずだ。

決意するために、深呼吸を一回して、心を落ち着かせる。

「いいよ。もし出来たら、ね」

「ちょっと、私の意見を無視するなっ、ぐええ！」

思わず、和美のお腹におもいきり手刀をいれていた。和美がおなかを押さえて苦しんでいる。これで静かになった。

「やったー！ 約束だよ、ケイちゃん」

「あいたー。もう本当に、知らないから。珪沙、責任とってよ。こんなことになっちゃたんだから」

和美はどうやら反論するのをあきらめて、しょうがないため息をついている。だがまだぶたれたところが痛いのか、残念そうにお腹を擦っていた。

「うん。ありがと、和美」

「ちっとも、人の話を聞いてないでしょ？」

「うん。それであなたは、何ができるの？」

「うわー、すごいスルー。珪沙、あとで覚えておいてよ」

不穏な発言は適当に無視して、雨稀と視線をぶつける。

雨稀も、待っていたように真正面から視線を合わせた。あの理科系オタクの視線と比べると、やや軽い感じもしたが、それとは違う言い知れない圧迫感を感じた。

「う、雨稀は、何ができるの?!」

その圧迫感から逃れるように、無意識のうちに声を荒げて、もう一度聞いた。

「私はね。 魔術 で人の誕生日を当てることができるの」

「……………」

二の句を継ぐことが出来ないまま、和美と私は目の前にいる 魔術師 を見つめていた。

「出来ないと思ってる？ 私にはそれが出来る。あなたたちとは違ってね、私は 魔術師 だから」

そう言っつて、私は確かに園比雨稀が鼻で笑ったのを見た。

誕生日の魔術 e p 1 - 8 (前書き)

ようやく出題篇です。園比雨稀の種を暴いてみてください。なぜ、そんなことができるのか？ 感想お待ちします。

「っていうか、そんなことなの？ ちょっと拍子抜けしちゃった。もっとほら 魔術 というぐらいだから、炎を出したり、風を操ったりとかそういうものかと、創造してただけだ？」

それは違うと思う。確かに 魔術 はそういうイメージだろうと思う。私も少なくともそう思っていた。和美が言うことも一理ある。でもそれは、真実ではない。

それを見越したように園比雨稀が、あざ笑った。

「和美。それは違うんだよ。確かにファンタジー要素が強いイメージがあるかもしれないけど、それがどんな些細なことでも、どんな馬鹿げたことでも、それが不可思議な現象だったら 魔術 になるんだよ。 魔術 の内容で、 魔術 かどうかが決まるわけじゃないの。炎を出すにせよ、年齢を当てるにせよ、誕生日をあてるにせよ、そんなの関係ない。内容ではなく、不可思議な現象なのかどうか、だよ？」

和美は納得していないのか、唸っている。まだ反論したいようだが、雨稀に何か言われるのが嫌らしい。それ以上何も言わず、不貞腐れて紅茶を飲み始めた。

「本当に出来るの？」

「うん。私が今からいくつかケイちゃんに質問をするから。その質問に答えて欲しい」

「質問？ その答えから私の誕生日をあてるとっていうこと？」

こくりと雨稀が頷く。この状況下でも、パフェを食べる手が止まらない。美味しそうに、三つ目のパフェのアイスクリームを食べている。

「それじゃ、やってみせて」

ここでやっと、雨稀のスプーンが止まった。口にクリームがついたまま、気にせず、こちらを見つめる。雰囲気が変わったのが分かった。彼女の中の撃鉄がカチリ、と入ったのだらう。圧迫感に加えて、眼光が鋭くなったような気がする。恐怖に似た寒さで、身震いをしてしまった。確実に圧されてしまっているのに雨稀は気づいている。

園比雨稀の 魔術 が始まった。

「ケイちゃんの生まれた日を10倍したものに生まれた月を足して。次にその結果を2倍にして、それに生まれた月を足してみて。それで終わり。その結果がいくつか教えて？」

「ちょっと待って。今やってみるから」

整理してみる。最初に自分の生まれた日を10倍。それに生まれた月を足す。次にその結果を2倍して、さらに生まれた月を足す。それだけだ。

「えっと、296になったけど？」

「ありがと。もういいよ、それであなたの誕生した月日は分かったから」

「え？ 分かった？ こんな短時間で？」

そんなはずは無い。結果を言うてから10秒経たぬうちに分かったというのか。それに口にしたのはあくまで計算結果だけだ。

「ケイちゃんの誕生日は、12月13日だね」

周囲の時間が一瞬凍った。

「嘘でしょ?! なんであなたが知っているの？」

和美が思わず、叫んでいた。叫んだ理由も分かっている。合っているのだ。誕生日があっているのだ。12月13日で合っているからこそ、和美は驚きを隠せず、叫んだのだ。

「そ、そんな、うそ。ありえない……」

「合ってる？ ケイちゃん」

信じられない。不思議だ。

自分の生まれた日を10倍。それに生まれた月を足すと、「142」になる。

さらに、2倍して生まれた月を足すと、「296」になったのだ。

「……………」

「その顔からすると、合ってるみたいだね。これで分かったでしょう？ 私が 魔術師 だったことが」

言葉を探して戸惑っている表情を見て、雨稀はまた手放したスプーンをもって、パフェを食べ始めている。

呆然と雨稀を見つめる。信じられない。確かに私の誕生日を見事に当てて見せた。混乱して冷静に考えることができなくなっているせいか、いくつかの質問を答えただけで、誕生日を当てられた。普通そんなことは考えられない。勘に頼って偶然に当てたということも考えたが、どうやら違う。当てるには相当の運と偶然が無ければ無理だ。それこそ、本当の奇跡が無ければ、だ。なら、考えられることは、一つ。

「あなた、知ってたんでしょ？」

「え？」

「あなた、最初から私の誕生日を知ってたんでしょ？ 和美から聞いていて、それを言っただけなんでしょ。魔術 なんかじゃない。雨稀のはインチキだ！」

「ちょ、ちよつと珪沙？」

「黙ってて、和美。ケイちゃんは私の 魔術 がインチキだって言うんだ。事前にケイちゃんの誕生日を知っていたっていうんだね？ 私が本当にずるして、そんなことをやったっていうんだね。すごい、可笑的い」

突然、くすくすと園比雨稀が笑い出す。

「な、なにがおかしいの？」

「だって。ケイちゃんて、本当に馬鹿なんだね。頭の中が見てみた
いよ」

「……………は？」

「……………は？」

なんていいやがった、この小娘は。私をつかまえて、言うに馬鹿頭が悪いと、はつきりと言いやがった。確かに、聞き間違いじゃない。こいつは私を罵った。紅茶をぶっかけてやりたい。

「だって考えてみて？ 和美と出会ったのは今日偶々だよ。もし事前に知っていたとするなら、こうやって私たちが出会ったのは初めから仕組まれていたの？ ありえないでしょ。私たちは、今日この日、偶々出会って、初めてケイちゃんと挨拶したの」

「……………そ、それは確かにそうかもしれないけど、でも待って。出会ったのは今日がはじめてでも、和美と前に合っていてそのとき私のことを話したかもしれないじゃない？ それだったら、今日偶々出会わなくても、いつか出会ったら、雨稀の インチキ魔術 で驚かすことは出来るよ」

咄嗟に出たにしては、中々の反論だと自分は思った。

はあ、と重いため息を吐いたのがここからでも分かった。雨稀は、今初めて馬鹿にするように辟易して呆れたのだ。

「ぶざけないで、この胸ペタ！ 何が可笑しいのよ」

この幼児体型だけは許せない。あの社会科教師よりも嫌いかもしれない。

「け、珪沙？ 口調が、怖いよ？ それに雨稀が言ってるのは本当……」

「うるさい。黙って、このオトコ女！」

和美が頭を突っ伏して泣いているみたいだが、関係ない。珪沙っ
ていつも怒ると口調が悪くなったたり暴れたりするんだから、と和美
がしくしく嘆いている。それも言い終わらないうちにおなかにもう
一度手刀を入れたら、静かになった。

「ケイちゃん、思い出して？ 私が和美と再会したのは、中学校卒業以来今日が初めてなの。それなのに、どうやって高校生になって知り合っただあなたのことを知ることが出来るの？ 普通に考えても無理でしょ、どう考えても無理」

「……うー」

「あ、それとねケイちゃん。言わせてもらっけど、私は胸ぺたじゃないよ？ ほらほら！これでもちゃんとあるんだから。きつとケイちゃんよりね！」

「なっ？」

胸を張ってそう言った。いや、言い換えよう。胸を張って勝ち誇って言いやがった、このインチキ魔術師。どうみても、胸がないのは一目瞭然だ。制服のラインがそれを証明している。これは絶対に間違えようもない真実だ。

言い返せない。園比雨稀の言っていることは正しいと思う。言い返せない自分がむしろしゃしゃるけど、どうしても納得できない。それはもう苺のショートケーキの上に苺が乗っていないぐらい納得

できない。

「ケイちゃんの誕生日を当てたのに、まだ信用してくれないの？」

「……」

無言の反抗を試みるしかなかった。今のところどうやって誕生日を知ったのかも、雨稀がやった魔術 に対しても何も反論できない。正直悔しい。

「どうしても信じてくれないなら、いいよ」

ずっと、雨稀の横目が寂しそうに細くなったのが分かった。信じてくれないのは誰もみな同じらしい。でも、雨稀の態度に何か不思議な感覚がする。

突然、雨稀はテーブルの脇においてあった、黄金色のベルを持つ。召喚用のベルだ。それをゆっくりと二回振った。風鈴のようなやさしい音が鳴る。数秒もしないうちにウエイトレスが来た。

「何か御用でしょうか？」

最初にあったおっとりとした雰囲気印象的なウエイトレスだ。その手にはワインレッドのトレイを持っている。どうやら、フロアは時間毎に交代しているらしい。

「すみません、お願いがあります。今ここに来ているお客さんに協力してもらいたいことがあるので、ここに集めてもらえませんか？」

「え？ あの、どういづことでしょうか？」

意味が分からないのか、ウェイトレスが首をかしげている。私も、雨稀の考えていることが分からない。

「私が皆の前で 魔術 を披露すると、言ってください。もちろん、強制はしないです。集まれる人だけで良いので、お願いしてもいいですか？」

「な、何をするつもり、雨稀？」

「信じないなら、信じさせてあげる。誰も会ったことがない人たちなら、誕生日を知ってることはないよね？ これなら事前に知ることも出来ない。だって、みんな偶々ここにきたのだから。そうだよ、ね、ケイちゃん？」

「……そ、そうだけど」

言葉に詰まってしまった。それと同時に気づいたのだ。彼女が何をするつもりなのかを。

彼女、園比雨稀は、これから本気でここにいる人全員の誕生日を当てるつもりなのだと、いまさらながらに気づいた。

誕生日の魔術 e p 1 - 9 (後書き)

もう一話か二話分は問題篇の続きになります。難波宗司と木頼珪沙の推敲篇はその後です。その後に解決篇に入ります。

「お願いね。ウェイトレスさん」

「少々、お待ちください。私には判断できないので、マスターに確認をとってみます。それで大丈夫でしたら、協力してくれるお客様を探してみます」

ウェイトレスが奥に下がると同時に、店内のジャズ音楽が、変わった。今度は静かな曲調のものだった。今の雰囲気とは完全にあっていない。この場の雰囲気は淀んで、重たく暗くなっている。

私は、冷たくなった紅茶を一口含む。冷たくなったせいも、苦味が余計強く感じる。口直しにはなった。

和美と雨稀は一言も言葉を発せず、黙っている。それが一層この場を重くしていた。

私は和美の耳元で、雨稀に聞こえないように囁いた。

「ねえ、和美？」

「…今度は何？ もうぶたないで、お願いだから」

がくがくぶるぶる、と震えだして怖がる和美。寒気で震えているのかと思ったが、見るところ私の乱暴な発言や暴力が原因らしい。そんなつもりはなかったのだが、興奮してしまったのが悪かった。男らしい言葉使いをしているからといって和美も一人の女の子なのだ。

「やらないよ。もう落ち着いたから。今のあれを見てどう思った？」

「あれ？ それってもしかして、雨稀が珪沙の誕生日を当てたこと？」

「うん。雨稀の 誕生日の魔術 について、どう思つか聞かせて欲しいの」

和美が唸る。考えているというよりは、どんな言葉で言おうか迷っているように見えた。

「……分からない、というのが私の答えだけど」

「それじゃあ、意味がないの。私が言っているのは…」

「落ち着いて。まだ私の話は終わってない。珪沙の誕生日を当てたのを横で見てた感想だけど、私も珪沙と同じ考え。だけど、勘違いしないで。私はインチキとは思っていない。ありえないとは思っていたけど、目の前で見せ付けられちゃったし。確かに珪沙の言うとおり、事前に知っていれば、答えることは出来ると思う。本当のところ、私は雨稀に珪沙のことを話したことも、話す機会もなかったのは事実なの。事前に調べることについてはむしろ、不可能だと思う。無論、運で当てたなんて以ての外ね。それだったら、わざわざ質問する意味がないし…」

苦い顔のまま、和美の視線は雨稀にあてられたままだった。和美にもなぜ、園比雨稀が誕生日を当てられたのか、全く分からないようだった。

「でもね、珪沙。一つだけおかしいことがあるの」

「え？」

私には、何も疑問に思うことはなかった。何も分からなかったというのが正しいけど。疑えたのは、雨稀が何故こんなにパフェを食べられるか、というどうでもいいことだけだった。

「おかしな点は、雨稀が質問した、ことなのよ……………」

「……………」

そうやって和美は黙ってしまった。そのまま、紅茶に手をつけている。何か話の続きがあると思っていたが、次の言葉はなかった。

「そ、それがどうしたの」

「気づかないの？ ついさっきも言ったけど、運で偶々当てたとしても、質問する意味がないの。でもその裏を返せば、わざわざ質問をしたということは、質問することに意味があったと言い換えることが出来る」

「質問に意味？ あの質問に？」

質問とは 生まれた日を10倍したものに生まれた月を足して。次にその結果を2倍にして、それに生まれた月を足してみても、のことを指しているのだろう。

これがどうしたというのだろう。和美の言うことが全く分からない。質問をすることの意味と言っているが、それが理解できない。

「きつと、雨稀は超能力で当ててない、ということよ。雨稀は何もせずに誕生日を当てたというわけじゃないと思う。きつと質問したことから、どうやってか、誕生日を推測したのよ」

確かに。もし質問の答えから推測できるとしたら、誕生日を当てることが出来る。たぶん和美の言っていることは、テストの問題みたいなものだと言っていることと同じだ。問題文があれば答えを導くことが出来る。答えがあれば、問題を逆算することも出来るということだ。

さすが、和美だと思った。

「じゃあ、やっぱりインチキ？」

和美は深くため息を吐いた。それだけならいいんだけどね、と首を振るつ。

「そうは簡単にいかない。いままで考えていたんだけど、雨稀の質問はおかしい。おかしいといってもその質問の中身よ。中身がおかしいの。その質問から、誕生日を出すことは出来ないの」

「？ 出来ない、ってどういうk……」

「何、こそこそ話しているの？ ケイちゃん。和美」

もう少し和美に突っ込んで聞こうとしたら、会話の邪魔をされた。

「な、なんでもない」

「ふーん。何を言い合っているのか知らないけど、信じないのはいかまわないよ。でも私の 魔術 は本当だよ。ケイちゃんの誕生日を当てたことは事実なんだからね。何言っても変わらないよ?」

意地悪く笑う。姿が幼稚園児に見えるだけあって、その姿は一層君が悪い。子どもばい人懐っこい性格はもう隠れてしまっている。子どもの悪戯、意地悪さが前面に出ている感じだった。

「おまたせしました。マスターが許可するということで、何人が集まってもらいました。これでよろしいでしょうか?」

誕生日の魔術 e p 1 - 1 0 (後書き)

もう一話だけ、問題篇は続きます。次回は園日雨稀が少しだけ、追
い詰められます。次の一話で物語を一度完結させます。時間を置いて、
推敲篇と読者の皆様から答えをいただきましたら、解答篇を載
せたいと思います。

誕生日の魔術 e p 1 - 1 1 問題編 e n d (前書き)

問題編の最後です。これで一度完結します。雨稀の 誕生日の魔術
にはどんなしかけがあるのか、あててみてください。感想をお待
ちしています。

「おまたせしました。マスターが許可するということで、何人が集まってもらいました。これでよろしいでしょうか？」

ウエイトレスの後ろには四人の人間がいた。この店内で協力してくれるお客らしい。こんな意味不明なことに付き合う、暇な人もいるのだなと思う。五人それぞれ特徴がある。男二人。女性三人いる。一人目の男は、老年の男性で白髪が目立つ人だった。もう一人の男は小さな子どもだった。女性の一人と手を握っている。親子でこの店に来て、親に連れられて、この場に来たらしい。女性の一人目はその子どもの母親で、服装から随分若い印象を受けた。二人目の女性性は、一人目の女性の友達らしく、その子どもと三人でこの店に来ていたらしい。茶髪が印象の若い女の子だった。俗に言うギャルママというやつらしい。最後の三人目は、ウエイトレス自身だった。おっとりした優しい印象があるほうのウエイトレスだ。名前を聞くと、カズツラトウヒというらしい。あまり少ないのもまずいと思ったらしく、わざわざ参加してくれたらしい。

今、この場に雨稀にとつて誰も知らない、様々な特徴を持った五人が集まったことにある。

「それでお嬢さん。これから 魔術 とやらを見せてくれるらしいが、馬鹿馬鹿しい。そんなことはありえん。だが、興味だけがある。どんな茶番劇をみせてくれる？」

白髪の老人だ。体つきがいいせいか、大きい身体を前面に出して、私を脅す。 魔術 という言葉に興味を惹かれて、この場に来たらしい。

「あの、私じゃないです。それをするのは、隣にいる、この子です」
超幼児体型の女の子を指差す。老人もその小ささに驚きを隠せない様子だった。

「なにいつ？」

「あははは、茶番じゃないよ。お爺さん。本当の魔術だよ。ついさつき、同じことをこの二人の目の前でやってみせたの。でも二人は信じない。インチキな手を使って、私がそれをやったという。だから皆さんにも、それがインチキではないことを証明してもらったために来てもらったの」

「ほお…」

若い二人の女性もいぶかしむ目を向けている。何やっているの、とやっていることを揶揄しているように見えた。和美と私は急に恥ずかしくなった。周りの視線が気になって、少し小さくなった。

「それで、いったい何をするというのかね？ お嬢さん」

「あなたたちの誕生日をあててあげる。今から私が、一つ質問をするから、その答えを教えてねー」

そう言って、雨稀はテーブルから離れて五人と話し始めた。さっきと同じ質問について話している。

「ああ、もう本当に知らないから。ここまで巻き込んだの、瑠沙と雨稀のせいだからね。本当にどっちも子どもなんだから」

今頃になって他愛もない挑発に引つかかってしまったと後悔した。もちろん雨稀も頑固で引かないせいで、余計拗れて、この現状だ。

「和美、雨稀はこの五人の誕生日をまた私のときと同じように当てる事が出来ると思う?」

「……たぶん。雨稀は出来ないことなら、やらないと思う。やるかには、全員のを当てる自信があるんだと思う。でも、私は出来るなんて思いたくない。もし五人、珪沙を含めれば六人だけど、それを当てる事が出来るなんて異常だ」

文句を言っていた和美が震えている。必死に何かを口にすることを恐れて、目を見開いている。

「和美?」

「珪沙。ほ、本当に偶然でも奇跡でもなく、質問の答えから推測したものでないとしたら、認めたくないけど、本当に 魔術 ってあるのかもしれない」

質問の答えから推測したものではない、とはどういう意味なのだろう。それを聞こうとしたが、これ以上聞くことが出来なかった。それ以上に 魔術 を認めつつある和美に驚いた。

「用意が出来たよ。ケイちゃん、和美」

和美と一緒にあって振り向く。雨稀が満面の笑みを浮かべていた。

雨稀が大きな声で周りにいる協力者に声を掛ける。

「それでは、園比^{わたし}雨稀の誕生日の魔術 をご覧に入れましょう。私の 魔術 の始まり、始まり。それでは協力者のみんな、さっきの質問の答えを教えてください」

「よく分からぬが、儂は23じゃ」

「私は461になったわ。7月22日この子は、430になったわ、これでいいの？」

「私は625よ」

「私は……69になりました」

数秒、場が沈黙した。態とか分からなかったが、雨稀はあえて時間を置いて五人を観察している。その沈黙の間が緊張感を生んでいる。

質問の五人の答えはそれぞれ「23」「461」「430」「625」「69」になったという。つまり、男性の老人が「23」。子ども連れの主婦の母親が「461」、子どもが「430」。その友達のギャルママが「625」。おっとりしたウエイトレスは「69」と答えたのだ。全くばらばらな数字で統一性などもちろんなくただでさえ数字の羅列に頭が痛くなる。これでは分からないだろうと思う。が、数秒もしないうちに雨稀が楽しそうに頬を緩ませた。

「あなたたちの誕生日。それでもう、分かっちゃったよ！」

ざわ、と沈黙していた場が急に騒がしくなる。馬鹿な、と声を上げていている人や、質問の答えから本当に誕生日を導き出せたのか疑問に思っている人もいる。

「まずはお爺ちゃん。お爺ちゃんは私が聞いた質問の答えは23で言ってたよね？」

にここに、と笑う雨稀。何が可笑しいのか唇を横に引きつらせ、気持ち悪く笑った。

「そうじゃが、何が可笑しい？」

「だって可笑しいでしょ。よく正月とお盆が一緒に来るっていうけど、おじいさんの場合は正月と誕生日が一緒に来るんだもん」

「なっ？」

「正確に言うと、元旦と誕生日が一緒。お爺さんの誕生日は1月1日。違う？」

びしり、と探偵の如く人差し指をつきつけて勝ち誇る。

「……………そ、そんな」

よろよろと老人の身体が左右に揺れる。老人には似つかわしくない肉体なのに、明らかに動揺して、近くにあるテーブルに身体を預けている。元気だった様子が急に萎んだように口をパクパクさせていた。

「合ってるでしょ、お爺ちゃん？」

周りの人も老人の様子から当たっていることを察したようで、子供連れの主婦は驚いたように眼を見開いて雨稀を見ていた。

冷静に見ている自分がいると思う。本当は雨稀をしつかり見つめなければいけないのに、身体が拒否して、視線を向けられない。自分自身が動揺しているのだ。

「それと、子供連れの二人さんだけど」

びくりと、主婦の肩が跳ね上がった。驚いて目を見開いていたが、指名されてさらに目が大きく開いた。子どもはまだ何が起こっているのかわかっておらず、母親の袖を握っている。

「一気にいくよー。お母さんの誕生日は7月22日。坊やのほうは10月20日でしょ？」

「?!」

お母さんが魂が抜けたように、ただ言葉無く雨稀を見て驚いていた。その反応を見る限り、両方とも当たっているのだということが容易に理解できた。子どもも不安そうな母親を心配するように、母親の手をぎゅっと握っていた。

「461」「430」という数字から、誕生日をまた当てたのだ。これで雨稀は五人中三人もの誕生日を当てたことになる。すでに五割を超え、六割当てていることになるのだ。

「それとその可愛いウエイトレスさん」

雨稀が指差す。その先には五人の後ろのほうで控えていたウエイトレスがいた。確かおっとりしたほうで双子の妹だということを知っていたような気がする。口元を手で隠しながら、ずっとこの状況を見守っていたらしい。

「お姉ちゃんの誕生日は3月3日ね。でも…」

雨稀の視線がすっと、ウエイトレスから外れる。何かを思索する
ように、目を瞑る。

「お姉ちゃんは本当にひな祭りが誕生日なの？ 本当にどうか、ち
よっとおかしな感じがするけど、本当にあってる？」

「あ、合ってますっ！」

「本当に本当？」

嫌にしつこく聞いている。自信の裏返しなのか合っていることを
強調させているようにも見える。

「言っている意味が分かりませんが、本当です。すごいです！」

ウエイトレスの目が大きく見開いた。本当に驚いているのか、両
手を合わせて感心していた。その様子を見ていた雨稀が深いため息
をつく。どうやら雨稀には何か引っかけることがあったらしいが、
この場にいる全員が何に納得できないのかが分からなかった。

「なら、いいよ。私の勘違いみたい」

これで五人中四人当てたことになる。そして雨稀の視線が最後の
一人に向いた。

「そして最後の一人、ギャルママさん？ あなたは「625」と言
ったよね？」

「え、そうだけど？」

「あなたの誕生日は……………」

「ぐくりと、雨稀が語るのを全員で見守る。雨稀の口がゆっくりと開かれるが、雨稀は二の句を継がなかった。また態と沈黙を作つて、臨場感を出そうとしているのか。それとも考えている雰囲気を出すために時間をかけているのだろうか。何にせよ、全員が雨稀の言葉を神のお告げを待つように待っている。

「1」、5月31日でしょ？」

漸く雨稀が声を絞り出すように、そう答えた。次の瞬間、全員の視線がその若いギャルママに注がれた。当たっているのか、当たっていないのか、ギャルママの動向に視線が集まった。

「……………そ、そうだけど、」

どおつと、騒がしくなる。ギャルママの声をかき消すように、周りがざわざわとざわめく。これで五人全員分、最初当てた分も合わせれば、六回当てたことになる。六人分を正確に当てた異常さに、集まった人がうめいた。

「ここにいる全員の誕生日を当てたじゃと？ 偶然ではなく？ ありえん。まさか本当に？ 信じられん」

老人が狼狽えている。確かに偶然で六人分も当てられるわけが無い。普通に考えて一年は365日あるのだ。その中から一日を偶然の中させることなど不可能なのだ。まして六人分を全体的の中させるなど、奇跡でもありえない。だとしたら、何らかの方法で雨稀は誕

生日を当てていることになる。雨稀が言う、不可思議な 魔術 と
いったような方法で。

鳥肌が立った。あまりにも異質おかしな出来事と、それを当然のように
当てる雨稀が不気味を通り越して何だか気持ち悪い。現実にも、日
常だけでなく、不思議な現象があるのだ。空想や幻想に存在するも
のが、現実じしに。

雨稀は勝ち誇っているのだろう。これで証明されたのだから。た
とえ誰が否定しようとも現実にそれをやり遂げてしまった。誕生日
を当てるといふ異質おかしな 魔術 を証明してしまったのだ。口頭の問
答ではなく、現実に見せ付けられたのだ。

雨稀は安堵しているのだろう。今まさに証明できたことに満足して
いるのだろう。不可思議な現象 魔術 で六人分の誕生日を当てた
のだから。

と思つてふと雨稀を見る。雨稀の様子が変わった。喜んでいると
思ったのに、笑顔を見せていない。雨稀はテーブルにおいてあった
お絞りをおでこに当てている。空調が聞いているはずなのに額に小
さな汗があった。ごくり、と雨稀が嚥下したのを見逃さなかった。
あれほど自信に満ちた態度と比べて、明らかに態度がおかしい。

(ど…どういうこと？ 動揺、してるの？)

その仕草に猛烈な違和感が身体を襲った。背筋に氷を直接つけら
れたような、寒気を同時に感じて、鳥肌が全身に立つ。だがその違
和感が分からない。自分では認識していないのに、無意識のうちに
何かがおかしいと身体が叫んでいる。

「ちよつと珪沙、大丈夫？ 身体が震えている。全部本当にあてら
れちゃったね。悔しい？」

「う、ううん」

「じゃあ…やっぱり信じられないよね。どんなに雨稀が当てて見せても、理解できないし」

違う。

「ん？ 何ていったの？」

「……………え？」

「ちょっと珪沙。きよとんとした顔しないでよ。今、なんていったのって聞いたの」

今の雨稀を見ていたら、そう思った。違うと思った。動揺する雨稀に、何か解く鍵があるのかもしれない。違和感があったのは、何時だった。どんな状況だった。

雨稀が緊張していたのは何時だった。

「ちょっと、珪沙！ 聞いている？」

「え？ あ、ごめ…ああっ??？」

がたり、とティーカップを派手にこぼす。あわてておしぼりをとろうとして、目の前からお絞りが突き出される。雨稀だった。雨稀がおでこに当ててたものだろう。

「ほらケイちゃん。使って？」

その申し出に数秒、考え込む。テーブルの端から紅茶がぼたぼた、たれて床をぬらしている。視線が合わせられない。私は負けたのだ。私はどう接したらいいのだろう。

「あ、ありがとう」

「ううん」淡白な受け答えだった。

和美があわてて自分のおしぼりを差し出して手伝おうとしてくれている。雨稀の戯言に付き合ってくれた参加者に対して丁寧な対応をしていた籐灯が、こちらに気づいて早足に代わりのおしぼりをとりに奥に引っ込んでいく。ぴゅーとまるでねずみが走るようなスピードで。

「みんな、ありがとうー ありがとうねー」

雨稀は手を振るが、拍手はない。異質おかしなものを見せられて、どの人も不審顔で雨稀から近寄らないように距離をとっている。それは観客がまるでいない舞台のような感じだ。いや、舞台から観客が逃げてしまっている。それでも、雨稀はただ笑顔を振りまいている。疑われてもなお、証明してもなお、信じてもらえていない。

それに応えず、一人、また一人と無言のまま店内から出て行く。まるで逃げていくように。何かから逃れるように。そそくさと。

そして、本当に舞台から観客が逃げてしまった。もう、この場所には私たち三人しかいない。急に静かになって聞こえなくなっていたBGMがやけに頭に響く。これはそう雨稀の好きな *someone happy* だ。気持ち悪い。

ゆっくりと雨稀が振っていた手をおろして、寂しそうに下を向いた。

「分かった？ 私はね。」

魔術師

「なんだよ？」

本当のね、と。そういつて、もう二度と私のほづを振り返らない。決め台詞を勝者のようにヒーローのように言い捨てて、テーブルにつく。その手にはすでにお店のメニューが握られている。

「さつて、何にしようかな？ ケイちゃん、和美。ちゃんとおごつてもらおうからね？」

覚悟してね、と確かにそういつたのを聞いた。

問題篇END

誕生日の魔術、

誕生日の魔術 e p 1 - 1 1 問題編 e n d (後書き)

解決編は少し後で、続きとして掲載します。難波崇司と珪ちゃんの推理、そして 誕生日の魔術師 である雨稀との対峙を書く予定です。

果たして社会科教師難波崇司と女子高生木頼珪沙は解き明かせるのか。

それとも先に読者がとくのか、挑戦してみてください。レベルはそんなにむずかしくないように設定しています。ご感想をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9762e/>

難波崇司の数学的魔術

2011年11月4日10時56分発行